

古代ローマ人の口腔衛生、ヨーロッパ中世の口腔衛生、含嗽、洗口剤とワイン、中世紀口腔衛生を支えた理髪外科医、近代歯科医学の確立、仏教思想と歯みがき、わが国古代からの歯みがき、江戸時代の歯みがき剤(粉)の商品化、自家製歯みがき剤、江戸の歯みがき粉と楊枝、明治時代以降の口腔衛生、今日の歯みがき剤、からなり歯科医学史家としての著者を知ることができる。

最終の「歯の病気と予防法」の項は、歯と食物、歯の構造、むし歯はなぜできる、歯周病、顎関節症、不正咬合、口臭、歯ぎしり、パラチノース、歯のみがき方、歯ブラシの選び方、歯間ブラシ、フロスシルク、電動歯ブラシ、老化・特に口腔の老化、インプラント義歯、レーザー照射による治療からなり臨床歯科医としての著者の診療姿勢がまぶたに浮かんでくる。

—そして「あとがき」。噛むことは、なぜ大切なことから始まり口腔の老化で食べない、噛まない(噛めない)、動けない、楽しくないでボケてしまふ、健康は自分で作るものです。したがって、歯や口腔内の健康管理は自分でやらなくて、だれがやるのでしょうか。

私は、ホームドクターを決めて、年三回、四カ月に一度は診療室を訪れてくださることを願っていますと人間ドックと同じように口腔ドックの必要性を強調しています。本書と著者に乾杯!

毎週何百冊という本が発行され、発行部数が競われている。

しかし、僅か二〇〇ページ余りに過ぎない本書が何と重く感じられることであろうか。

(谷津 三雄)

〔求龍堂・東京都千代田区紀尾井町三―三文藝春秋ビル九階、電話〇三―三二五九―三三八一、一九九一年発行、B6判、二二九頁、定価二二〇〇円〕

神農五千年刊行委員会編『神農 五千年』

『神農五千年』には、一つの伝説、二つの事実、三つの心が述べられている。

一つの伝説とは、神農の伝説である。二つの事実とは、まづ神農から始まり太公望呂尚をへて、朝鮮半島に至った姜一族の歴史である。もう一つの事実とは、近代東アジアに起こった未曾有の歴史変動にもあそばされた人々の数奇な運命である。三つの心の第一は、この『神農五千年』の出版費用の全額を出資された姜云培氏の民族と氏族にたいする篤実なる心である。心の第二は、姜氏の求めに応じて、この書物に素晴らしい論文を寄せられた研究者たちのあつち思いである。

もう一つの心は、それはこれらの論文によって明らかにされた中国朝鮮韓国日本台湾などに、なお連綿と続く神農への信仰である。

伝説の神農は、楠山春樹「神農の神話伝説」、石川忠久「神農と文学」、劉起釭「中国における神農崇拜」に明らかである。

事實は、姜信沆「神農と韓国姜姓の系譜」には、韓国の姜氏の歴史が書かれている。さらなる事實は、姜云培氏の「発刊にあたって」に述べられた氏自身の運命である。氏をはじめとする在日の韓国人の人々をもてあそんだ東アジアの歴史変動は、数奇な現在を生み出している。氏族を思う心と自らのアイデンティティをもとめて、この本の出版費用を出資された姜云培氏の思いこそ胸をあつくするものである。また韓国済州道の晋瀛祠廟庭に炎帝神農淵源記碑「姜氏淵源記」を建立されたのは、その思いを後世に伝えるものである。

この論文集に論文を寄せられた研究者たちも、それぞれの分野で活躍されている人ばかりである。杉原たく哉「神農像の成立と展開」、小曾戸洋「神農と医薬」、崔來沃「韓国の農神信仰の研究」は神農にかかわる諸問題に答える好論文である。

神農はいまなお中国朝鮮韓国日本台湾などで信仰されている。村山吉廣「日本における神農崇拜」、内山知也「台湾における神農崇拜」、加藤道理「湯島聖堂の神農像と祭祀」には人々に崇拜され尊敬される神農の信仰が述べられている。

最後に医薬と神農の関係について言及しておく、小曾戸論文がその事情に詳しい。この論文は二つの章から成り立っている。「神農本草経」の世界」と「医薬文献に見る神農賞賛の歴史」である。「神農本草経」の世界」は現在の「神農本草経」の研究状況を明らかにしたものであり、今後「神農本草経」を文献として取り扱うためにはまず必見のものである。

ろう。「医薬文献に見る神農賞賛の歴史」は、小曾戸氏が近年一番注目している分野の一つであり、充実したものになっている。特に室町末期から江戸末期まで続く神農像の変遷は、当時の医家がどれほどまで神農を尊敬していたかを明らかにしている。杉原論文とともに興味ある内容である。

神農は福建や台湾では、お米屋、農民、薬種商の神様であるという。日本では、香具師ややくざの神様でもあるらしい。また近年の中国での信仰の状態などは、この本では伺えない。朝鮮半島における神農は、職業神とはならなかったであろうか。神農への興味はまだまだ尽きないものがある。この本がその一里塚であることは論を待たない。

(猪飼 祥夫)

〔斯文会発行・東京都文京区湯島一―四―二五、電話〇三―三二五―一四六〇六、平成七年発行、B五判、四六五頁、頒価一〇、〇〇〇円〕

寺師睦宗著『漢方を築いた先哲』

寺師睦宗氏はいまさら御紹介するまでもなく、大塚敬節氏の門人で、かつて日本東洋医学会の会長をつとめられ、現在、慶応義塾大学医学部客員教授としても活躍されている漢方界の重鎮である。臨床家としてはとくに不妊症の治療に卓抜した実績を挙げておられるが、医学史にも造詣が深く、とりわけ江戸時代の漢方家、たとえば永富独嘯庵・内藤希哲・喜多